

## 生命を支える奇跡と偶然 (あの戦争を顧みて)

北九州市八幡西区 伊藤 岳央

人は常に不時の災害にいつ遭遇するかは不明である。一寸先はいつも闇である。

たとえば1月17日に発生した阪神大地震がそうであり、毎年日本列島を襲う台風、風水害、火山の噴火等による自然の脅威と破壊がそれで、生命の危険が常に潜んでいる。

または日常茶飯事のように頻発する交通事故や、3月20日に発生した東京地下鉄のサリンガス事件のような人為的災害もあるが、これらを遙かに凌駕する災害は戦争である。

戦時下であればその場所の如何を問わず、常に生と死に曝らされるのである。しかもその被害のエスカレートするのは、近代兵器の進歩が大いに影響するからでもある。

そうした災害から紙一重の差、1分1秒の違い、または5歩10歩の差で生を全うするのは運であり、奇跡とか偶然の言葉で表現されるけれど、あの戦時下でこれを経験した人はほとんどの方たちではなかったか。現在健全な身体に感謝しつつ当時を省みるのも意義がある。

さて、私の部隊は昭和14年5月、よく晴れ渡った青空の下で、砲を、馬匹を、その他弾薬等を博多港で積み込み、夕暮れ出航した。

さらば祖国よ！の感慨をこめ、玉屋デパートの吹奏楽団の奏でる勇壮な曲、例えば愛国行進曲などと、波止場を埋めた見送りの群衆の振る日の丸の旗と、軍歌に和した口々の合唱に送られ出航した。

以来、華北－華中－華南－を経て仏領インドシナ（ベトナム）－ラオス－タイで終戦を迎えた。その間、100回を上回る戦闘に参加したので、こうした運・不運や、奇跡等は数え切れぬ体験をした。

しかし、私の部隊は砲兵隊の通信班に属していたので、歩兵部隊のような華々しい活躍には及ばなかったが、常に戦闘には歩兵部隊に配属され、それなりに前線に立った。

その初めての戦闘は忘れることができない程印象が強い。砲4門で攻撃中、敵の迫撃砲の集中攻撃を受けて集落の屋根の炎上の中、中隊長戦死、小隊長以下8名の負傷等の被害を蒙ったことがある。

その時、通信器から離れることもならず通信業務を遂行したが、こんな混戦なら、どこにいても弾丸は当たる時は当たると覚悟を決めてより、通常通り業務が全うされたことが、この後の幾多の経験の基礎となった。

たとえば昭和16年12月23日（この日の記憶はより鮮明だ）の朝、郵便が配られた。その一通は学友からだったが、『君も父君を亡くして寂しかろう…』の一文にしばし呆然となったが、当時の戦時下では親と子の宿命としてどちらかの死に目に会えぬは覚悟していても、現実を知ることはやはり胸に響いた。

ところがその夜、駐屯地より10km離れた一集落に便衣隊潜入の報に接し、急遽わが隊より

出動を命ぜられ、私は第4分隊長として参加、集落南門よりの攻撃を命ぜられた。

分隊員8名と共に南門守備に着くと同時に敵の一団が殺到し、激しい銃撃戦を展開した。着剣した小銃に強い衝撃を受けた。見ると着剣部が弾丸で切断されていた。よくぞ剣に当たってくれてわが身を守ったと慄然としたのを今も覚えている。亡き父の加護かも知れぬ。

また昭和18年10月、華南道県付近でも設営のため兵数人と先行したことがある。付近一帯は砂糖黍の産地で砂糖を精製している。1人の兵隊が黒砂糖の板状の物数枚を見つけて、私にも1枚くれた。久し振りの甘味に堪能したが、その夜、その兵隊が発熱した。看護兵の言ではコレラかも知れぬという。後送するにしても馬も自動車も無い設営隊のため、私が背負って後方6kgの野戦病院へ急行した。

同じ物を食べ、同じ水を飲んでもこんな結果になるのは運であり不運だと悟った次第。

その兵の死亡を聞いたのは3日後だった。

また桂林攻撃の朝10時頃、連絡のため宿舎後方の丘上に登り周囲を散見して驚いた。周囲の丘はどれも交戦中で銃声は交叉して、どこが敵やら友軍やら区別も出来ぬ中を、自動小銃が反響していた。伝達終了して草に座して煙草一服の目が、わが靴先を見て一瞬不審を覚えた。脚先20cmを土煙りが連続して起こったのだ。自動小銃で狙われていると知るや、反対側に転げるように走って伏せた。

あと30cm程で私は負傷していたのだ。

次に最も印象強く、生命の有難さを知ったのは昭和19年3月半ばに、仏領インドシナのドンダンでの生々しい体験である。

その時も設営のため10名を引率して旧仏軍のコーロ兵舎に先発し、一応設営も終了したので昼食を兵舎で済ませた時、敵機数機の襲来を知り退避を命じ、私は兵舎一巡し残留者無きを確認した後、兵舎間のタコ壺に飛びこんだ。

そして上空を見ると、既に敵機の放った爆弾がキラリキラリと落下しているではないか。

その瞬間、私は不意にそこを飛び出し、次のタコ壺に転げ込み上衣を脱ぎ頭から被った。と、同時に耳を劈く物凄い音と、閃光と爆風に一時意識を失ったように覚え、頭上に土砂等が落下したのを悟った。

どれ程の時間が経過したのか知らぬが、音も風も絶え、散開していた兵達の呼び声に気付き、私はタコ壺から出てその声に応じた。驚いたことには、先刻まで休憩していた舎屋が大半破壊されているではないか！

それよりも肝を冷やされたのは、最初はいっていたタコ壺の真中に、不気味に光っている不発弾を見た時だ。言葉もなくそれを見守る私だった。肚の底まで震え上がった。

生きるとは、死ぬとは正に紙一重だ！これを奇跡とか偶然とか、または運不運の別れ道と唱えるけれど、別の見方では神仏のご加護かもしれぬとこの齢になって初めて悟った。

こんな体験をされた方は無数にあると思うのだが、せっかく生き延びてきたからには、お互いもっともって生命を大切に、有意義に余生を過ごそうではありませんかと、私は訴えたい。